

国際化推進室ニュースレター No14

目次

- | | |
|---------------------------------|-----|
| 1. 教職員交流の新たな一歩 | … 1 |
| 2. 国際共同研究・学術訪問団 | … 1 |
| 3. 地域派遣(最終回)を行いました | … 3 |
| 4. 春期海外語学・文化研修及び交換留学の出発式が行われました | … 4 |
| 5. 交換留学生の帰国報告 | … 4 |
| 6. 第3回 Y&I 交流会が開催されました | … 5 |
| 7. 学生チューターや留学生と過ごした一年 | … 6 |
| 8. 国際化推進室勤務を始めて | … 6 |
| 9. 今後の予定 | … 6 |

1. 教職員交流の新たな一歩

国際化推進室長 岩野 雅子
海外の学術交流提携大学とは、1)学術情報の交換、2)教職員交流、3)学生交流、4)その他合意された各種交流を行うこととしている。ここ数年間は特に、学生交流者数を増やし、キャンパスの国際化を進めることによって、海外に出ることができない学生に対しても国際交流の機会を提供することに努めて来た。次に目指したのが教職員交流である。近年の大学教育改革においては、教職員を海外に派遣して研究や教育、大学事務や専門的スキルの向上を図ろうという動きや、海外から教職員を招いて知的・専門的刺激を受けようという動きが加速している。

このような流れのなかで、本年度はまずアメリカの姉妹大学から教職員を受け入れ、本学からも相手大学から必要とされる分野で寄与できる教職員を派遣することとなった。昨年12月にアメリカ・センター大学から受け入れたのは、大学教育改革を推し進め、全米ランキング上位の地位を得る努力を重ねてこられたミルトン・リーガルマン教授であった。研究者としても、教育者としても、また学長特別補佐という役職においても、さらには、地域文化のプロデューサーとしても活躍されているリーガルマン教授の姿に、講演を聞いた教職員も、講義を受けた学生も、また市民公開講座に出席した一般市民の方々も、大いなる刺激を受けた。

本年3月に本学からセンター大学に派遣されるのは、田中マキ子教授である。看護領域でのコース新設を考

えているセンター大学から期待が寄せられている。同時に、オバマ大統領の政策のもとで国民健康保険制度について大議論中のアメリカにおいて、一般市民向けの講座でも関心が高いと予想されている。

大学教育の国際化においては、教員は教員の、職員は職員の交流成果があるとされている。本学においてもできるだけ多くの教職員に、特にまだ海外の姉妹大学を訪問したことのない教職員に、こういった機会を利用していただければと願っている。



(学内講演の様子)



(盛況だった市民公開講座、クリエイティブスペース赤れんがにて)

2. 国際共同研究・学術訪問団

◆ 看護栄養学部交流で 姜振家附属病院長、董蓓副院長来学(青島大学との国際共同研究)

看護栄養学部長 藤村孝枝

2007(H19)年10月30日青島大学より江里学長に名誉教授号が授与され、その授与式に私も同行させて頂き、青島大学の看護学科長と今後の学術交流について意見交換をしました。その翌年は青島大学の看護学科の先生を山口にお招きする計画でしたがオリンピック

や諸般の事情で実現できず、2009（H21）年12月9日青島大学 医学院長兼附属医院長姜院長、董副院長先生の訪日を実現しました。

2日間の日程で、看護栄養学部教員との交流会をもち、看護学科の主たる実習病院である総合病院山口赤十字病院と山口県立総合医療センターを大学院の施海燕さんの通訳で見学して頂きました。交流会には、看護学科教員16名、栄養学科教員2名が参加し、国際文化学部の馬教授に通訳して頂き約2時間にわたる協議を行いました。青島大学看護学科の学生数は1学年100名で、現在は5年制教育（基礎教育3年＋臨床実習2年）ですが、来年度は4年制教育を考えておられるようで、日本の看護教育システムとの違いを実感しました。短時間での情報交換だけでは、なかなかお互いの教育や臨床看護実践の違い、特徴を理解し合うことは難しく、先日青島大学から、来年度は相互に短期研修の機会をもちたいという提案がなされました。また、共同で調査研究に打ち組むことの合意は協議の中で得られ、来年度は毎年開催される青島の「ビール祭り」に是非多くの県立大学の教員に来てほしいというお誘いを受けています。今回、姜先生、董先生に来て頂き、青島大学との学术交流が一步踏み出せたことは大きな成果だったと思います。来年度は青島ビールを飲みながら、さらに交流が深まることを祈念いたします。



(協議の様子)



(送別会の様子)

◆ マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラストス教授来学 (ラップランド大学との国際共同研究)

国際共同研究 / 公開講演会と研究協議の報告

国際文化学部文化創造学科教授 水谷由美子
本学と学生交流の覚え書きを結んでいる（本年4月末に学术交流協定締結予定）ラップランド大学から、デザイン学部の共同研究者マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラストス Marjatta Heikkilä-Rastas 教授（芸術学博士）を2010年1月21日～25日まで本学に招いた。1月21日の夕方には、看護棟F204教室において、「地域資源を生かした豊かな生活文化とサステイナブルデザインー フィンランド・ファッションの世界ー」をテーマとして、ヘイッキラ教授に講演をしていただいた。この講演会は山口EU協会のセミナーとしても実施され、200名の教室は満席で、立ち見が多く出て盛況であった。

ヘイッキラ教授は祖母そして母親と2代続くフィンランドを代表する高級ファッションハウスを営む家に生まれ、自らもデザイナーとして1960年代から活躍してきた。フィンランドらしいファッションデザインが誕生したのは1950年代初頭にファッション&テキスタイルブランド、マリメッコが誕生したことに端を発しており、フィンランド固有のファッションの形成やすばらしいデザインこそがサステイナブルなデザインであると語った。また、講演では自身の代表的な作品3点を展示し、フィンランドの生活スタイルや価値観を身近なものとしてくれた。

1月22日は本学の共同研究グループ（田村 洋教授 井生 文隆教授 小南 英昭准教授 松尾 量子准教授 山口 光講師 小橋 圭介助教 水谷 由美子）との研究協議を実施した。協議では地域資源、サステイナブルそしてヒーリングをキーワードとする研究事例が紹介され、山口における新しいモデルを作る共同研究の可能性が生まれ、非常に実り大きいものであった。

現在、ラップランド大学の2名の留学生が本学で学んでおり、デザイン学部のトゥッティ・タイパーレ（Tytti Taipale）は、両大学の今後のますますの研究創作が活発にされる様子を見て感激していた。



(学内講演の様子)



(「地域デザイン実習」の成果発表展に訪れ Tytti の作品を見るマルヤツタ教授、左)



(3年生展の Tytti の作品、赤レンガにて)

◆ 曲阜師範大学より学術訪問団（荆兆助理事長、李效増院長、李海清国際交流処長）来学

11月24日（火）～26日（木）、曲阜師範大学より学術訪問団が来学した。懇談会では、江里理事長より曲阜師範大学の2つのキャンパスを訪問した時の思い出が語られ、今回新しく理事長として来学した荆理事長と、今後も相互交流をさらに深めていくことについて合意がなされた。特に本学で実施されているグローバル学生交流の気持ちは高く、より多くの学生に機会が与えられないかといった要望がよせられた。



(懇談会終了後、学長室にて)

3. 地域派遣（最終回）を行いました

留学生を地域に派遣する県内5ヶ所（1泊2日）での相互交流型国際理解講座も4か所が済み、最後の交流は宇部市で行いました。

◆ 宇部市交流

県内5か所への1泊2日の留学生派遣事業の最終回を、新年早々の1月16日・17日に開催した。今回参加した学生は、日本人女子学生2人、アメリカ人女子学生2人、男子学生1人、フィンランド人女子学生2人、スペイン人男子学生1人、中国人女子学生3人、韓国女子学生1人の合計12人となった。午前中は、山口ふるさと伝承センターを訪問し、日本文化を学んだ。まずは、「たくみ館」にて大内塗りに関するの講義を受け、次に大内塗りの箸を各自一膳ずつ完成させるという実技を体験した。次に「みやび館」に移動して、着物の着付けを教えていただいた。

昼食後に宇部市総合福祉会館をお借りして、山口大学工学部の学生15名と合流し、アメリカのセンター大学からの留学生3名がアメリカ文化についてスライドを使いながら英語で紹介した。その後、グループに別れてのディスカッションを行った。夕方から、双方がお互いの料理を教え合うプログラムを企画しており、アメリカン・フードと日本料理を共同で作るという作業がみんなをすっかり解きほぐしてくれた。チリスープと焼き餃子が出来上がり、食卓の準備をする頃には、言葉の壁を越えて一つのことを協力して成し遂げたという一体感から盛り上がりを見せていた。

二日目の午前中のプログラムは、宇部市西岐波ふれあいセンターにて地域の方々と一緒に「七草がゆ」をつくるというものであった。宇部市婦人会と西岐波ふるさと運動のみなさんのご協力の下に地域交流をさせていただいた。七草の由来や地域活動についての説明があり、調理場に移動し婦人会の方々に教えて頂きながらの実践がはじまった。地元で摘んできた七草を使ったてんぷら、味噌和え、白和え、胡麻和えなどが次々に完成し、手分けして70人分の盛り付けを終えた。地元の人々や子どもたちも加わり、「七草料理を楽しむ会」が始まった。午後には、昨日交流を深めた山口大学生9名と合流する会場に移動し、若者同士のトークに花を咲かせた。

若者同士の交流のお世話をしてくださった宇部ユネスコ協会の方々、また、地元の多くの方々と触れ合う機会をつくってくださった宇部婦人会ならびに西岐波ふるさと運動のみなさまに心から御礼申し上げたい。



(着物の着付け体験)



(「七草料理を楽しむ会」にて)

4. 春期海外語学・文化研修及び交換留学の出発式が行われました

2月3日(水)、平成21年度「春期海外語学・文化研修生」7名及び平成22年度「交換留学生」5名(韓国慶南大学校2名、中国曲阜師範大学2名、青島大学1名)の出発式が本館大会議室で行われました。

本年度初めて行われる研修となる「春期海外語学・文化研修」は、国立フィリピン大学内の慶南大学校研修施設において、慶南大学校の学生とともに英語を学ぶプログラムです。4週間にわたって学生を派遣します。学生たちは1人ずつ決意の言葉を述べ、江里学長から激励の言葉をいただきました。



(派遣証書の授与)

5. 交換留学生の帰国報告

平成20年度に中国・曲阜師範大学、青島大学、韓国・慶南大学校に交換留学していた学生が1年間の留学期間を終えて帰国しましたので、留学の様子をご紹介します。また、本学に交換留学生として来学した学生のメッセージも紹介します。

ここに掲載している報告はほんの一部ですので、ホームページもご覧ください。

◆ 慶南大学校(韓国)への交換留学生

国際文化学部国際文化学科2年 藤村菜美
私は生の韓国語や韓国文化に触れたいと思い、韓国に留学することを決意しました。留学生活は本当にあっという間でした。実質慶南大学での学校生活は10カ月余りしかなく、時間の流れがとても早く感じました。韓国を訪れた当初は右も左も分からないので、授業にもついていけずとても苦勞しました。しかし、そんなときに力になってくれたのは友達でした。今年は日本人留学生のうち、女子学生は私だけしかいませんでした。最初はとても不安で心細かったのですが、今考えてみるととてもラッキーなことだったのだな、と思います。毎日韓国人の友達と一緒に遊び、勉強もし、寮に帰ってもルームメイトは中国人のお姉さんだったので、毎日韓国語漬けの日々でした。そのおかげで、思っていたよりも早く韓国語に慣れることが出来ました。段々と授業にもついていけるようになり、また週に一回違う大学の日本語を勉強している友達と会い、私は彼女に日本語を、彼女は私に韓国語を教えるというスタディも行っていました。授業で分からなかったこと、日常生活で不思議に思った表現など、とてもいい勉強になりました。韓国では言語や文化以外にもたくさんのことを学びました。一番気付かされたことはやはり「出会いの大切さ」です。いつも一緒にいる友達に、「もし菜美が韓国に来なかったらお互いの存在も知らないままなんだよね。」と言われ、本当に出会いは不思議なものなのだというのに何度も気付かされました。そして韓国人の情の深さにはたくさんの影響を受けました。友達が苦しんでいたら、自分も一緒に苦しみ、友達が悩んでいたら一緒に悩む。してあげているという気持ちは全くなく、して当たり前という気持ちを持っていて、私もそんな人間になりたいと強く思いました。今回の留学で私は人の温かさに触れ、改めて日本で応援してくれていた家族、友達、先輩に感謝し、韓国で出会った全ての人にとありがとうの気持ちでいっぱいです。そして、韓国で出会った友達との関係はこれからもずっと続いていくでしょう。なかなか会えないけれど、たった一年しか一緒にいなかったけれど、お互い思い合っていればそんなことは関係ないと

思います。この留学を通して、自分が学んだこと、気付けたことを周りの人に伝えていき、決して留学経験が無駄にしないよう、そして韓国で学んだ「出会いの大切さ」「情」をいつも心に置き、山口での生活にも生かしていきたいです。

今回交換留学生として慶南大学に派遣していただき本当にありがとうございました。



(日本語教育学科のみんな)

◆ センター大学 (アメリカ) からの交換留学生

Jim Ransdell

私をオヘア空港から成田空港まで安全に運んでくれたボーイング 777 を降りる時、これから日本での 4 ヶ月に何が自分を待ち構えているのかさっぱり分からなかった。もちろん日本のことは、映画やアニメや本などで見てきたし、県大からセンター大に一年前に留学して来ていた学生と友達になり、日本の文化や日本語を 1 年間勉強して来たけれど、でもまだ、日本に来たこともなかったし、これから日本で起こることを想像するには、あまりにも知識が無かった。

その晩は、東京のユースホテルに泊まり、何本かの電車を乗り継ぎ、新幹線に乗り、バスに揺られてやっとの思いで仲間と共に県大に到着した。アパートに入り、オリエンテーション、チューターの紹介などのスケジュールをこなし、できるだけ早く時差ぼけを解消しようと努力した。それから日本についての探求を本格的に始動した。しかしながら、私の滞在日数や県大生との交流、授業などを考えると、観光旅行というものが一切できなかった。確かに東京や大阪、沖縄、別府や阿蘇山に行くこともできたし、山口の隅々まで行けたかも知れない。でも、観光できなかったということがつまらないと言う訳ではないし、それほど重要なことでもなかった。

私の日本での経験を活かしたものにしてくれたのは、やはり県大の学生たちと、また山口周辺の方々と育んだ友情だと思う。最初の頃はチューターやセンター大学に留学経験のある県大の学生だけだったが、時が経つに連れ周りの方々と親しくなるだけでなく、同じクラスに限らず新たな出会いがどんどん増え、ホストフ

ファミリーも紹介してもらい、大学の外の人たちとも友好を深め、クラブ LAB にも入れてもらった。これらの多くの人たちは、私に日本語を教えてくれてその練習相手になってくれるだけでなく、山口を案内してくれたりして、親友にもなった。将来、金閣寺の形を忘れたとしても、県大の友達と過ごしたこの数ヶ月のことは忘れることは無いだろう。途方も無いほどの感謝の気持ちが湧き上がり、また本国に帰りたくなくなるということがこのプログラムの特徴である。



(お正月を体験)

6. 第3回 Y&I 交流会が開催されました

* Y & I には Yamaguchi & International、You & I、友&愛などいろいろな意味が込められています。学生支援部や学生委員会の担当者が、日本人学生と留学生との気軽な交流を行うイベントを企画しています。

1月13日(水)「第3回 Y&I 交流会 (地産地消料理教室) : やまぐちの料理教室」に、留学生9名と日本人学生7名が参加し、郷土料理を通じて交流しました。



上関から管理栄養士の穴井恭子氏と食生活改善推進員(食推)の村田喜代子氏を講師に迎え、上関の伝承料理である「押し寿司」、「味噌たて」、「けんてん」を作りました。



最初に講師の先生方から前方の調理台で作り方を御指導いただきました。「具沢山の押し寿司には、お米が貴重であったため、具材を増やすことによってお米の

かさを増そうという昔の人の思いが詰められている」ことなど、上関の歴史や風習も伝えて下さいました。



最初は言葉の壁を感じていた参加者たちも、調理をはじめると自然と協力し合い、押し寿司を型からはずす時は、拍手が起こるほど和気あいあいと楽しんでいました。



試食の時間は、ちょうど夕食時刻にあたり、山口の食材をふんだんに使い、みんなで作った料理に舌鼓をうちながら、和やかな一時を楽しんでいました。

学生支援 GP ホームページより転載
(<http://blog.ypu.jp/gp/article/001727.html>)

7. 学生チューターや留学生と過ごした一年

交換留学生と本学の学生がカフェテリアで一緒に勉強している様子を見かけられた方も多いと思います。これらの学生は、公募によって採用された学生チューターの皆さんです。活動内容は毎週3回（各1時間）の出会いの時間をつくり、留学生が日本での生活を支障なく送れるように支援したり、日本語学習の補習をしたりすることです。入学当初は生活支援が主になりますが、後半はレポートの添削や、授業の課題の補助などもしています。活動時間以外では、買い物に行ったり、地域のお祭りや行事と一緒に参加したりもしているようです。

留学生は、4月と10月の年2回来学します。本学からの学生は3月と9月にそれぞれの国へ出発します。国際化推進室は、留学説明会や募集、選考手続き等に始まり、入国までの支援をします。逆に本学への留学志願者には、事前のオリエンテーションや入学許可書発行の手続き、入国管理事務所での在留資格認定書(留学)取得、入国後のオリエンテーションなどの支援を行います。その間に、学生チューターのマッチングもします。いよいよ入国してくるときには、空港や新幹

線駅に迎えに行きます。どんな学生が降りたって来るのか、一番楽しみな瞬間です。半年後、1年後には逆に見送りに行きますが、様々な体験を共にしてきて離れたい瞬間になります。留学生はほぼ全員が大学宿舎で生活します。宿舎利用や地域のルールも教えます。

様々な活動を通してふれあう交換留学生や学生チューターですが、送別会では全員が企画や運営にあたります。お世話になった教職員、ホームビジットをした家族、そして友人たちの前で、ひとりひとりが日本語で活動の様子や感謝の言葉を述べるのを聞くと、留学の成果や人間的な成長をみることで感謝します。

国際化推進室の仕事は、人と人を結び、国と国を結ぶやりがいのある仕事の一つだと思います。これからも学生チューターの皆さんと連携して、学生一人一人の自立と連帯の後押しができるようにさらに業務の改善に努めたいと思います。(国際化推進室 堀江新子)

8. 国際化推進室勤務を始めて

私、本年1月より国際化推進室でお世話になることになりました 梶 建次と申します。

なんだ！この漢字は、見たことないと思われているかと思いますが、「かこい けんじ」と申します。ルーツは鹿児島県にあるのですが、私は大阪生まれの大阪育ちで、根っからの関西人です。大阪にいた頃は、空港免税店の仕入業務を長年に亘り携わってきました。大学勤務は初めてで、まだまだ右も左も分からず手探り状態です。もう四半世紀前になりますが、私自身アメリカに留学していた頃には、沢山の方々のお世話になった経験もあり、これから留学する本学学生や海外からの留学生が、少しでも楽しい留学生活が送れるように努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。(国際化推進室 梶建次)

9. 今後の予定

- ◆ 4月1日(木) 平成22年度前期交換留学生オリエンテーション&歓迎ランチ
- ◆ 4月2日(金) 交換留学生市内研修
- ◆ 4月6日(火) 12:00-13:00
2-4年生向けの国際交流プログラム説明会(A32教室)
- ◆ 4月7日(水) 10:55-11:10
1年生向けの国際交流プログラム説明会(講堂)

山口県立大学国際化推進室 桜翔館2階
Tel(内線):083-928-3413 (3413)
email:kokusaika@yamaguchi-pu.ac.jp
ホームページ:大学ホームページより「国際化推進室」をクリック